数式処理 *Bulletin of JSSAC(2024)*
Vol. 30, No. 2, pp. 1 - 1

巻頭言

『今を生きる 2024』

横山 和弘 *

立教大学理学部

本雑誌（数式処理）が 30 巻に到達されましたこと，お祝い申し上げます．創刊時の，進取の気風に富み新たな分野を切り拓く若者から力を蓄えた責任ある壮年になってきた感があります．そこで，長年数式処理に携わりなんとか生きてきた者として，読者の役に立つような気の利いた言葉を書いてみようと思いましたが，よいアイデアが浮かばないため，前回（2004 年第 10 巻第 3 号）に書いた巻頭言を読み直してみました，稚拙なものではありますが，冷静に読んでみるとなかなか自分の書いたものながら興味深いものでした．（誉められるものではありませんが）

「今を生きる」というタイトルで，当時の「国立大学の改革と競争的資金」について書いていました．民間企業から「夢と希望にあふれて」大学に移ってはみたものの・・・という話で，「思っていたのと違う」気持ちでいっぱいなことが読み取れます．焦点としたテーマは当時の言葉で「産学連携」，すなわち，「現代社会の役にたつ」ということでしたが，これは今でも難しい話だと思います．数式処理（計算機代数）は数学と情報科学（計算機科学）の境界分野に位置し，理学と工学にまたがるものですので，「その研究は何の役にたつのですか」という質問に，「面白いから」という答では質問者はますます満足してくれなくなっているかと思います．「研究のモチベーションがどこにあって，研究のゴールがどこか」が簡潔なストーリーとして説明できればよいのですが，多くは，「その先に何があるかわからないので知りたい」が念頭にあり，とりあえずのゴールでお茶を濁す感じかと思います．

では「どう答えればよいのか」という問題に対して 20 年前の自分の意見に同意する自分がいます．（20 年間進歩していないです．）答になってはいませんが，前回の文章（一部編集）を引用して拙い文を閉じたいと思います．（確かに 20 年経って分かってきたテーマもあります）

「数式処理でいえば，システムやらアルゴリズムは日々良いものに置き換わり，記録は更新されている．すぐにも滅ぶ理論もあれば，新しい世界を開く理論もあり，滅んだとも思ったら復活する理論もあろう．しかしながら，本人には，やっている最中にそれが分かるはずもなく，次の世代，次の次の世代になってわかるのだろう．私たちは，ただ，知的好奇心と美学をもって，研究に励むしかないだろう．社会貢献に関しても同様で，未来に期待するしかないものもあれば，やっている最中に社会貢献できるものもある．（それはそれで，幸福の極みであろう．）」

*kazuhiro@rikkyo.ac.jp